**№11　テーマ『この命を何に使うか』**

**講話日2010年7月12日**

**皆さんこんにちは。今年は本当に例年になく蒸し暑い梅雨で、なかなかお仕事も大変だと思いますけど、どうぞ健康に気をつけて頑張ってください。今日のテーマですけど、「この命を何のために使うか」。これは人生哲学の根本命題と言って、人生を生きるあるいは仕事をしていく上で最も大事な問いだという風に言われているものです。人生哲学の根本命題…命題というのは、命という字との問題の題という字を書くわけなんですけども、人生哲学の根本命題というのは、命に課せられた根本の問いと言えるもので、「人生においても仕事においても、この問いに答えることなくして素晴らしい人生はありえない」という風に言うことができるほどの根本の大事な問いという風に言われているものであります。**

**まず、なぜ「この命を何に使うか」ということが、人生哲学の根本命題と言うことができるのか。その根拠というものは、４つあります。そこからお話をしてみたいと思います。なぜ、「この命を何に使うか」に対する答えを求めていくという生き方をしないと、素晴らしい人生というものにすることができないと言えるのか。**

**その理由の第１番目は、このレジュメに書かせていただいているんですけど、人間は何のための生まれてくるのか。人間が生まれてくる理由、目的というのは、歴史をつくるためである。　人間は皆、新しい時代を呼び起こすために生まれてくるのである。すべての人において、自分が生まれてきた理由を考えた場合、すべての人に共通する答えとして言えることなんです。人間は皆歴史をつくるために、新しい時代を呼び起こすために生まれてくるんだ。表面的には生まれてくる人間が亡くなってしまったら、歴史は終わってしまう、歴史は終わってしまいますから、生まれて来るということは必然的に時代を前に進めていくことにかかわる意味を持って生まれてくると言えます。もっと学問的な本質的な意味は何なのか。なぜ人間は新しい時代を呼び起こすために生まれてくるんだという風に言えるのか。その理由は、生まれてくる人間というのは皆、その両親から遺伝子をもらって生まれてくる。そういう意味においては、子どもというのは全て過去の人間の２人分の可能性を一身に受けて生まれてくるのである。すなわち、子どもというのは親を超えて生まれてくるんだ、と言えます。両親から遺伝子をもらって生まれてくるということは、過去の人間の２人分の力、可能性を自分がもらって生まれてくる…その意味においては、いつの時代でも「今の若い者は！」と言われて、大人たちは若い人たちに対して「何か頼りない、任せきれない」という不満を言いますが、だけども大人たちから頼りにならないと言われてきた若者たちが、必ず大人たちが見たことない未来というものをつくり出して、そして大人たちを越えて今日までやってきた。これが歴史の事実なんです。**

**そのことを考えるならば、結果として生まれてくる子どもたちは、大人たちが見たことのない未来をつくり出して生きていく。そういうところから必然的に歴史をつくっていくということになるわけです。だけども、ただ両親から遺伝子をもらってくるだけでは、歴史をつくるということはできません。歴史をつくろうと思ったならば、過去の人間が誰もやったことがないことをしなければならない。そういう意味では、生まれてくる子どもというのは、原理的にいって過去の人間が誰もやったことがないことを何かできるという力を皆、命に与えられて生まれてきていると言うことができます。それはどういうことなのかと言ったら、確かに両親から遺伝子をもらって生まれてくるから、子どもには過去の人間の２人分の可能性をいただいているんだけど、両親から遺伝子をもらってくるだけでは、遺伝子は過去ですから新しいことはできません。なぜ、子どもたちは過去の人間が誰もやったことがないことをして歴史をつくることができるのか。**

**それは命というものが有機体であって、両親からもらってきた遺伝子が自分の命の中で有機的に絡み合って、その相乗効果・シナジー効果として湧いてくるものがその子の力なんですね。シナジー効果というのは掛け算ですから、両親から遺伝子をもらってきたものが、自分が命の中で掛け算となって有機的に絡み合って、そしてその相乗効果として出てくるものがその子の力ですから、シナジー効果として出てくる力というのは、過去になかった全く新しい力だと言うことができます。生まれてきたからには、皆、過去の人間が誰もやったことないことを何かできる、という力を自分を持って今生きてるんだ。そういうことを知る必要があるわけです。その意味においては、生まれてきたからには自分は何らかの意味で、過去の人間が誰もやったことないことを何かやって生きて死んでいかないと、この時代に自分が生まれてきた価値がない。そういう風な自覚を持って、我々は生きていかなければなりません。歴史をつくるために生まれてきたんだと言うならば、「俺はこの時代において何をすれば良いのか」「この命を何のために使えば良いのか」という問いかけが生まれてくることになるわけであります。**

**とにかく、この命を何のために使うかという問いを持って我々は生きなければならない、ということの第１番目の理由は、我々は歴史をつくるために生まれてくるからである。故に「俺は何をして歴史をつくるということをしたら良いのか」を考えるところからこの問いが出てくるわけです。仕事、職業という観点から考えるならば、自分が建築・建設の仕事をしているということを考えるならば、今自分がやっているこの仕事において、自分は過去の人間が誰もやったことがない何かをこの仕事に付け加えて、そして、この仕事において歴史をつくる、そういう思いで職業人という者は、この時代においてその仕事をしていかなければならないということになるわけです。ただただ決められたこと、言われたことを従順にやるというだけではなくて、何かしら今自分がやっている仕事に新しい価値、過去になかった全く新しい何かをこの仕事に付け加える、そういう意識で仕事をしていって、そしてこの仕事に歴史をつくっていく。そういう生き方が、職業人においては望まれるということになるわけです。そういうところから、この命を何のために使うかという問いが生まれてくる。**

**２つ目は、人間と動物の生き方の違い、そういうところからも問いに対する問題となってくる。人間以外の動植物は、与えられた環境にどう適応して生きていくか、そういう生き方しかできない。だけど人間というのは、与えられた環境をより素晴らしいものに変えていく生き方ができる。そこに人間的な生き方の基本原理があるわけであります。人間以外の動植物は、与えられた環境にどう適応しようかという生き方しかできないが、人間は与えられた環境をより素晴らしいものに変えていく生き方ができる。より素晴らしいものに変えていくというような生き方をしようと思ったら、現在より何かしらより素晴らしいことを考えなければならない。理想、夢、目標を立てなければならない。立てたものに現実を近づけていく。そのために仕事をする、生きるという生き方が出てくるわけなんです。そういうところからも、どういう理想というものを持って自分はこの現実を生きていくか、そういうことが人間的な生き方の課題となってきます。この命を何のために使うか、という意識が生まれてくるわけです。**

**続いて３番目は、理想がなければ流される。現在、ほとんど多くの方々が、「何がしたい？」と言われても「別に、特に何がしたいということはありません」という風に答える。命から欲求が湧いてこない、何を自分がしたいのかがわからないという状態に陥っていると、言われるわけです。自分にしたことがないということはどういうことなのか。自分自身が何か、こうなりたい・こうありたいという強い欲求を持っていないとは、どういうことなのか。基本的には、したいことがない人間は他人に与えられたことをさせられてしまう。他人に与えられたことをするのは奴隷だ、家畜だ。人間であるならば、最低限度少なくとも、自分の肉体だけは自分の意志と決断で動かさなければない。自分の肉体が他人の意志によって支配されれば、それは奴隷でありまた家畜的な生き方である。そういうことであるならば、最低限度人間として生きるということをする場合には、何かしら自分に自分なりのしたいことがあって、そしてそのことのために自分の命を使うという生き方をしなければならない。**

**だけども、会社というところはほとんどの仕事が会社から要求され、上司から言われたことを忠実にやっていくってことをしていかないと、会社・全体としての仕事の流れというものがうまくいかない。だから会社という組織の中で働くことになれば、必然的に他人に言われたことを間違いなくちゃんとこなしていくことが求められてくる。だけども、その場合でも単に上司から言われたからこれをやっているんだということではなく、本当に人間として自分自身が価値のあると言うか、誇りのある生き方をしようと思ったならば、単に上司から言われたからやるのではなく、「俺もそう思う。俺もそうするべきだと思うからやっているんだ」という自分自身における捉え方をしていかないといけない。人間として仕事をしていこうと思ったのなら、今自分のやっている仕事は確かに上司から言われた仕事なんだけど、「俺もそうするべきだ。そうする必要があると自分もそう判断した。だから自分はこの仕事をしているんだ」。としないと、自分の肉体を自分の意志によって支配して、そして自分で自分の人生を生きるという生き方にならないのです。そういう意味においても、我々は自分の今の行動あるいは目的というものを単に他人に言われたということではなくて、自分もそうしなきゃならんと思う、そういう形で自分の行動の目的というものを立てて、そのために命を使う。そういう生き方をしないと、人間的な生き方をしているとは言えない。そういう目的を持って生きるという生き方、仕事の仕方を自分がするためにも、仕事の上でもこの命を何のために使うか、そういう問いに対する答えを自分が意識しながら、今自分のやっている仕事のために自分の命を使う。すなわち、他人に言われたからやっているのではなくて、「俺もそうしなければならないと思うからやっているんだ」という主体的な意識を持って仕事をしていくことが、大事な人間としての生き方になってきます。**

**そうでないと組織の中では機械的な、人に使われっぱなしの人生ということになってしまって、本当に自分が仕事をする喜びが湧いてこなくなってしまう。アサヒグローバルという会社に勤めて、そして会社の中で自分の人生をつくっていく、そのための仕事をしていく、そういうことを考えたならば、毎日毎日やっている全ての仕事を自分自身の人生をつくっていくためという意識でやっていかないと、本当の自分の生きがい、充実感というものが出てこないことになってしまいます。とにかく、全て仕事を自分もそうすることが当然であって、そうしなければならないという判断に基づいて仕事をしていく、ということが非常に大事な人間としての仕事の仕方である。単に言われたから、しょうがないからやっているというのでは、奴隷的な機械的な仕事の仕方では、その仕事の中に自分の気持ち、意志、自分の人生をつくっていくための仕事という意識が全くない。そういう意味では、常に今自分のやっている仕事に自分の命を使うことが、自分にとって納得できる生き方だという意識が人間には求められてくることになります。そうでないと、自分の人生をつくっていくという形での仕事にならない。永久に人に支配されて、使われっぱなしで 生きていく状態になってしまっては、人生そのものが非常に虚しい、つまらないことになってくる。そういうことからしても、「この命を何のために使うか、この命をこのために使う」、そういう自覚というものが人間には人生において要求される。**

**最後の４番目の理由は、永遠の生命と個体的生命との関連性。どういうことなのかと言ったら、我々は一般的に「おいくつですか？」と言われたら、「○○歳です」と答えるのが常識なんですけども。それはせいぜい100年生きる個体的生命の年齢である。だけど、個体的な自分の命の中には、地球上に生まれてから今日まで38億年間生き続けてきた永遠の生命というものが、自分の命には流れている。我々は単に何十年か前に生まれて、そして今生きているという命ではなくて、我々のこの命というものは、地球上で38億年間も生き続けてきた命である。38億年間、この地球上で生き続けてこなかったならば、人間という命にはなれなかった。そういう意味においては、我々の個体的生命の中に流れている命そのものは、もうすでにこの地球上で38億年間も生き続けてきているのである。だから、我々の生命年齢を考えるならば、皆平等に38億歳だということ。本当に生命の年齢を問われたならば、「おいくつですか？」「38億歳です」と答えなければいけないということになってきます。これが命というものの本当の年齢ということになるわけです。**

**ですから、この38億歳なんて、どんな歳だって話になりますよ。おじい、おばあの話ではない、化石どころの話ではない。本当のなんちゅうかほんちゅうか冷やし中華の世界でして、何とも言いようがなくとにかくは古い。だけれども、それが本当の年齢なんだ。38億年間、この地球上で生きてきた命しか人間にはなれなかった。それが本当の自分の生命年齢だ。せいぜい100年生きるこの自分の個体的生命というのは、永遠の生命のこの時代における仮の姿だ。ですから、本当の自分の本体、本当の俺というのは、実はせいぜい100年生きる個体的生命のことではなくて、地球上に生命が誕生して以来、38億年間ずっと生き続けているという命が、本当の自分というものであります。だから、座禅、瞑想、ヨガという修行をして悟りを開くとなったとき、どういう自覚になるかと言ったら、「俺は永遠の生命だ。宇宙だ」と実感できたとき、本当に自分を悟ったと言われるんです。**

**実際問題、我々は大宇宙の一部分の命であって、大宇宙なのです。38億年間ずっと生き続けているという命が、本当の自分というものであります。そういう意味で、本当の自分とはなんなのかと言ったら、宇宙だ。永遠の生命だ、と言える。それが本当の悟り。**

**もっと大事なことは、自分はこの時代に人間として生まれてくることができるためには、自分の命の祖先たちの各時代に生きた個体的生命たちが、その時代時代を一生懸命に生きて、一回も過去戦いに負けることがなかった。どこかで戦って負けて死んでいたら、自分はこの時代に生まれてくることができなかったということになります。だから自分という命をこの世に生み出すためには、自分の命の祖先たちは38億年間の戦いに負けることになく、一度も問題・悩み・苦しみに負けることなく、全部それを乗り越え続けてきた。だから今ここに人間として生まれてきているという事実が確認されるわけであります。そういうことを考えたならば、自分の命の祖先たちが戦いに勝ち続け、またどんな問題・悩みにも負けることなくそれを乗り越え続けてきてくれたから、今ここに人間として生まれてきているんだ、ということを考えたならば、自分もやはりその祖先たちの努力に恥じない、報いるような生き方をしなければならない…という思いが湧いてくることになるわけであります。しかも永遠の生命というのは、ただ生き長らえている、ただ生き続けてきたというのではなく、確実にそこには進化、時代を経過するごとに命はより質の高い命というものに進化・成長して今日に至っている、という歴史が確認できるわけです。時代時代において、問題を必死に乗り越えて生きてきたから進化して、人間という生物が出てくるという段階に至った。だから、自分もやはりせいぜい100年生きるこの命を進化させることに関わるような生き方をしないと、祖先たちの命の努力に対して恥ずかしいな、という気持ちが出てくることになるわけであります。**

**この時代を我々が人間として生きていくために、どうしても忘れてはならない命というもの在り方、素晴らしい原理なんです。我々は、せいぜい100年生きるこの命、永遠の生命を進化させるために生きなければならない。自分の命の祖先たちは、自分をこの時代へ生み出すために必死の努力をして、あらゆる戦いに勝ち続け、あらゆる問題・悩みを乗り越えて、今自分は生まれているんだ。であるがゆえに、その祖先たちの努力に恥じない、また報いるような生き方をしなければ、恥ずかしい申し訳がない。そういう意識が命から湧いてくるはずであります。そういうところからも、この命を何のために使ったならば永遠の生命を進化させられるのかを考えていかなければない。深い自覚に基づく人間の生き方というものを表現する原理なんです。**

**とにかく、なぜ我々はこの命を何のために使うかという問いに対する答えを求め続けながら、人生を生きるということをしなければならないのか。なぜこれが人生哲学の根本命題、一番人生にとって大事な問いと言えるのか。その理由が、今申し上げた４つの理由であります。根拠を土台にしながら、我々はこの命を何のために使うか、という人生の問いに対する答えを求めていく必要があります。**

**この命を何に使うか、これをもっと短く言ったら、人生の目的とはなんなのかを考えるということになる。人生の目的とは何なのか、直接的に考えたのでは、明確に根拠を持った生き方、人生の目的というのはものを我々は掴むことができません。自分の体験・経験に基づく解釈でしか人生というのは語れない。本当に我々が人生というものを学問的根拠を持って、誰も反対できない、誰も否定できない、誰も逆らえない根拠を持ったものとして人生を考えていこうと思ったならば、我々は人生の目的の根底には、生命の目的がある。命の目的が根底にあって、それを土台にして人生の目的が出てくるんだ。生命と人生は内面的な繋がりがあるということを原理にした考え方をもって、人生について考えていくことをしないといけません。そうしないと根拠を持って人生を語る哲学にはならないということです。**

**そういうところから、生命の目的とは何なのかを考えるとどうなるか。生命の目的は何か、これは中学の教科書にも出てくるので誰でも知っていると思いますが、答えが２つあって自己保存と種族保存。あらゆる生命は自己保存と種族保存のためにしか生きていない。これが生物学的事実と言われているものであります。生命には目的があるとは、どういうことなのか。命はただ単に生きているのではない、命は常に目的を追求しながら、目的を実現するために生きるのが、命というものの現実的な姿である。単細胞生物でも命を維持するために必要な、生きてくために必要なエネルギー、物質を捕獲する目的を持って動き回って生きている。それが単細胞生物の次元においての命の在り方。だから、その目的を持たない命というのは行動できません。動かないとは死んでいること。命が生きているという状態で存在するためには、常に目的を追いかけながら生きているという状態が必要である。つまり、目的のない命は存在しない。ただ生きているのではなくて、目的を実現するために生きるということをしている。そう考えたならば、命というものには常に目的があるのであって、目的のない生命は存在しない。目的がない命はもうすでに命ではない。命というのは、常に目的を実現するために生きるという在り方をしているんだ。**

**目的のない命は存在しない…これはどういうことなのか。命には命より大事なものがある。命はただ生きているのではないんだ。目的を実現するための生き方をしているんだ。命は目的を実現するために使われているんだ。だから命には、命より大事なものがある。命が一番大事ではないんだ。命というものには、命を懸けても、命を賭しても、命を捨てても求めていかなければならない目的があって、初めて命は命と言えるんだ。命には命よりも大切なものがある。命が一番大事ではないんだ。これが生物学的に言って、命には目的があるという事実から分かってくる人生の答えなんですね。**

**なぜ、命には命よりも大事なものがあるのか。命が一番大事ではないんだと言えるのか。確かに命というのは、生きたい生きたいと言うように思っているものなんですけども、だけど命が一番輝くとき、それは「このためになら俺は死ねる。このために生きて死ねたら本望だ」というものに出会ったとき。このとき、命は最も美しくも激しく輝く、燃え上がる。そのものに出会わないと、命は完全燃焼しない。死んでもいいと思えるものを持たない命は、不完全燃焼の燻った命だ。だけど残念ながら現代は、科学的な生命感というものが皆に浸透していますから、命が一番大事であって命以上に大事なものはないんだという意識で生きてしまっている人が多い。だから、ほとんどの人が「これをしたら病気になるかもしれないからやめておこう」とか「これをしたらケガをするかもしれないからやめておこう」、「これをしたら死んでしまうかもしれないからやめておこう」として、命が一番大事だという生命観からは、感動的な素晴らしい人生は出てこない。命が一番大事だと言うのではなくて、命には命よりも大事なものがある。このためなら命を捨ててもいい、そういう生き方をしないと命というものは本当には輝かない。そういう生命観を持つことによって、人生には感動あるいは輝き、命が燃えるという状態が出てくるのである。これが命には目的があるということの哲学的な意味、あるいは命には目的があるという生物学的な知識を人生を生きるための力に変えていく考え方であります。命に目的があるということを生物学的に知っただけでは、それはまだその知識は我々が人生を生きる力にならない。**

**だけども、学校で学ぶすべてのものは、単に知識として知って試験に答えるために学んでいるのではない。あるゆる学問が何のためにあるのか、それは人生を力強く生きていくための力をつくるため。だけどもほとんどの人が、学校で習った学問を本当に自分が人生を力強く生きていくための力に変えているのではなくて、単なる知識として頭の中に持っていて試験に正しく答えることができる、そういうことのためにそれを知っている…そういう勉強の仕方をしているだけで終わっている人が非常に多い。本当の意味で、何のために人類は学問をつくったのか、学問とは何なのか、ということに対する本当の自覚、本当の必要性を知らないということ。本当の学問というのは、学んだことを自分が人生を生きる力に変えていくということ。そういうことをしないと、本当に勉強をしたことにはならない。生物学も物理学も数学も心理学も、あらゆるものも自分が人生を生きる力に変えていく。そういうことをして、学問的知識を自分のものにしていかなければならない。そういう観点から、命には目的があるということは、どのような人生を生きる力になるのかと言ったら、つまり、命には命よりも大事なものはあるということなんだ。命が一番大事ではない。人生には命よりもっと大事なものがあるということなんだ。そして具体的には、「このためになる俺は死ねる」というものを持たないと、命は完全燃焼しないということなんだ。初めて命は輝くんだ。初めて命は燃えるんだ。死んでもいいというものを持たないと命は燃えないんだ。**

**実際問題、恋愛をしても本当の恋愛をして、本当に相手を好きになって、本当に好きで好きでたまらないとなってきたら、必ず「この人のためだったら死んでもいい」と言い始める。そのときその人の命は最高に燃えているんだ。恋愛が一番上がった瞬間であります。死んでもいいと思える実感が湧いてこないと、命は燃えていない、完全燃焼していない、輝いていない。死んでもいいと思えるものを持ったとき、命は最も美しく燃え上がる。本当に人を好きになって、この人のためなら死んでもいいと思えるような意識になった人は、最高に美しいですよ。恋愛すると美しなると言われるんですけども、この人のためなら死んでもいいと思える状態になってくると、命が完全燃焼して燃え上がるから、命が最も活かされて最も美しい姿になることができる。**

**その意味においては、我々は今自分のやっている仕事の中に、「このためなら俺は死んでもいい」と思えるような価値・意味を感じて、そしてその仕事をしているという自分をつくっていかないと、本当に素晴らしい人生を生きることはできないと言えます。どんな仕事でも社会に存在し、それを多くの人に必要とされているならば、どんな仕事にも他の仕事に置き換え難い素晴らしい価値・値打ち・素晴らしさがあるんですよ。そしてその自分の今やっている仕事の本当の値打ち、本当に素晴らしさ、本当の凄さに自分が気が付いたならば、誰でも「俺は仕事のためなら死んでもいい」という思いが、どんな仕事でも湧いてくる瞬間がある。本当のプロは、今自分のやっている仕事の本当の素晴らしさ、本当の凄さを知っている人のことです。会社に入って、だんだん仕事を覚えてそしてだんだん仕事に熟練していくんですけども、それは本当のプロになる道なんですよ。仕事を実際自分の肉体を使ってやりながら、だんだんと仕事が身に付いていく。本当のプロになったら、誰でもその仕事の本当の素晴らしさ、本当の凄さ、本当の値打ちを身にしみて感じるようになっていく。そのとき、ほとんどの人が「俺はこの仕事をするためにこの時代に生まれてきたんだ。これこそ俺の使命だ」という意識に到達する。本当のプロとしての仕事を持った人間の意識です。使命というのは、使うと命という字を書くわけですが、使命を持つということは、命の使いどころを掴んだ人のことですよ。この命を何のために使うか、命の使いどころを何に定めるかをちゃんと掴んで持っている人を使命感があるという風に言うわけです。**

**どんな仕事でも10年続けたら、誰でもその仕事の本当の素晴らしさというものを感じることができるようになるという風に言われております。10年で誰でもプロになれる。だけども、そういうことになるためにはただ言われていることをやる、従属的な受け身の仕事の仕方ではダメ。仕事をしながら、この仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さはどこにあるのか、ということをずっと探求しながら生きて10年経てば、必ず感じられる。そういう人間になれるんだと言われているわけです。ただ漫然と仕事していたのでは、永久に人に使われっぱなしの人生で終わってしまう。だけども、本当に自分がこの仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さはどこにあるのかを探求しながら、そういうものを掴みたいと思って仕事をしていたら、必ず10年経てば掴める。どんな仕事でも、それは社会に存在する限りは、多くの人にそれを求められているわけですから、それなりの意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さが皆あるわけですよ。どんな仕事でも価値のない仕事はない。全てに価値がある。だから存在しているんだ。そういう意味でも、歳を重るごとに今自分のやっている仕事の本当の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さに気付いていく。そういう仕事の仕方というものを我々はしていかないと、本当のプロの道を歩んでいくことはできません。**

**プロというのは、他人のために仕事をして金をもらうというか、金を取る仕事の仕方をプロと言いますが、客に金の出し惜しみをさせているようではいけない。これだけのことをしてくれたのだから、これくらいの金は当然、と思って快く金を払ってくれる仕事をしないといけない。そのためには、客から見て「さすがプロ」と言ってもらえるような仕事をしないと、快く金を払ってくれるということにならない。そういう仕事の仕方をしようと思ったら、その仕事をしている人間が仕事に惚れているまたはこの仕事のためなら死ねる、という熱情を持っている姿を見せないと、客は感動しないし「さすが！」とは言ってくれない。とにかく、我々が本当のプロとしての仕事をしていこうと思ったならば、今自分のやっている仕事のどこかに「このためなら死ねる」と言えるものを発見しないといけない。死んでもいいと思えるほどの魅力を感じながら、仕事をしていないと客にさすがとは言わせることができない。ぜひそういう死にうるものとの出会い、死んでもいいと思えるほどの素晴らしさを仕事の中に見出すことができる、そういうことを目的に毎日の仕事をやってもらいたいと思います。**

**とにかく基本的に言って、命には命よりも大事なものがある。命が一番大事ではない。人生には命よりも大事なものがあるんだ。そういう生命観を持って仕事をしてもらいたい。そういう生命観を持たないと、本当に素晴らしい、感動的な人生というのは生まれることはない。愛でも、本当の真実の愛に人間が目覚めれば、必ずこの人のためなら死んでもいい、このことのためなら死んでもいい、そういうことになる。愛国心というのは、国家のためなら死んでもいいということ。仕事への愛とは、「この仕事のためだったら俺は死ねる」、それが職業愛。人を愛する愛においても、この人のためなら死ねるというのが真実の愛。愛における最高の姿というのは、死んでもいいという心情。だから親はこの子のためなら死んでもいいと思って子どもを育てるんですよ。子どものために必死になって努力して、自分のことを顧みずに子どもを育ててきた。子どものためにどんなことも自己犠牲とは考えないで、あらゆる犠牲を当然のことだと思って、親は子のために尽くす。それが子育て。そこには、子どものためなら死んでもいいと思える、命よりも大事なものとして子どもというものを考える。そういう親の生命観がある。そういう生命観に支えられて、皆育てられてきたんだ。このためなら死んでもいいと思えるような生き方から、人生の価値というのは生まれてくるわけであります。命には目的があるという生物学的事実が持っている重要な人生に関する自覚というのか、命には命よりも大事なものがあるという理解の仕方というものを是非よく分かっておいてもらいたいと思います。**

**その次に、生命の目的と言われる自己保存と種族保存というのは、どういう形で存在するものなのか。生命の目的という風に呼ばれる２つの目的は、現実には自己保存の欲求あるいは種族保存の欲求と言われて、生命の目的は欲求として存在し、欲求として湧いてくるという在り方をしています。どういうことなのかと言ったら、我々における人生の目的というものも、欲求として湧いてくるものでなかったら価値がない。人生の目的というのは、欲求として湧いてくるものでなければならない。なぜなら、欲求が伴わないと行動ができない。欲求が湧いてこなくなったら行動を止める。欲求が湧いてくる限り、人間は行動し続ける。我々が人生において実現したいと思う目的は、欲求が伴っていなかったらそれは実現できないんだ。欲求が伴っていない、頭だけで考えた目的は人生を苦しくする。実際問題、我々は頭でいろいろ計画を立てますよね、頭で立てた計画をいざ実践しようと思ったら、人間は皆その計画に縛られる。縛られて堅苦しい辛い苦しい人生が始まるんだ。だけど命から湧いてくる欲求としての目的を持って、「こうなりたい、こうしたい」と思って、そういう命から湧いてくる欲求を持って生きたならば、これほど楽しい、愉快な生きがいを感じることはない。頭で考えた目的は、命を苦しめる。命から湧いてくる目的としての欲求は、命に喜びを与える。人生大違いだ。重要な人生を生き切るための基本原理であります。すなわち、生命の目的は欲求として存在する。だから、人生の目的も欲求として持たなければならない。欲求として、湧いてくるものとして持たなければ、人生は楽しくない。では欲求としての人生の目的というものを持って、我々が生きていこうと思ったら、どういうことを考えないといけないか。**

**欲求というのは、意味や価値を感じることによって欲求が湧いてくる。人間の心というのは、意味と価値を感じる感性なんです。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。心は意味を感じないと燃えない。価値や意味を感じないとやる気にならない。だから我々が欲求としての目的、欲求としての理想というものを持って生きるという生き方をしようと思ったならば、我々は今自分がやっていることの意味と価値と素晴らしさを感じないと、欲求は湧いてこない。命は燃えないということを知らないといけない。どうしたら我々は、欲求を持って仕事をすることができるのか。そのためには、今自分のやっている仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを知るだけではなく、感じないといけない。しかし、まずは知らないと感じることはできない。知ると、感じる感性が成長してきて、感性がそれを感じたときに欲求が湧いてくる=やる気になる。その状態になって命が燃え始める。欲求としての目的、理想を持って生きるためにも今自分のやっている仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを毎日求め考えながら生きることをしなければならない。**

**今年の３月には、アサヒグローバルさんの事業計画発表の素晴らしい会に出席をさせていただきました。そのときに社長さんがおっしゃったことですけど、家を建てるということは一生に一度、人生における最大のイベント、夢。そういうものに自分たちは関わって仕事ができている…なんと素晴らしいことか。そういうお話をされました。これも今自分がやっている仕事に情熱を傾けるための重要な根拠になる、そういう価値観であります。そういうことだけではなくて、もっといろんな観点から自分の今関わっている仕事というものが持っている意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを、考えて考えて考え続けてほしい。そして、本当に自分の命が燃え始めるまでこの仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを考え続けてほしい。意味を感じたら必ずやる気が湧いてくる。欲求が湧いてくる。興味関心が湧いてくる。命から湧いてくるものができてくる。そうすれば、命は燃え始める。命が燃える状態になることによって、我々は普通の人間ができない素晴らしい仕事ができ、普通の人間以上の成果を上げられるような人間になれる。家を建てたいと思っているお客さんの願いを叶えてあげて、お客さんに本当に満足して喜んでもらえる家を建てることができる幸せの価値を考えたならば、本当に我々はこの仕事ができて良かったなと言える気持ちが湧いてくるはずであります。その人の、そのお客さんの一生に一度の夢に関わって、その夢を実現させてあげるんだ、という喜び、生きがいが湧いてくるのではないかと思うんですよ。そういう喜びを持ってお客さんの夢を叶えてあげる仕事をする。ここに人を感動させる、客を感動させる、本当のプロとしての仕事の姿が出てくるのではないかと思うんです。**

**とにかく、命の目的という欲求として存在する。だから、人生の目的も頭で考えるのではなくて、欲求として持たなければならない。そのためには我々は、今自分のやっている仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さをよく考えて、そして理性で考えた意味や価値や値打ちを感性で感じられる自分というものを、つくっていく努力をしなければならない。そのためには仕事も漫然とするのではなく、ただ上司に言われたことをするだけではなく、自分自身が仕事をしながら、今自分のやっている仕事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを常に追い求めながら、自分を成長させていく。そういう仕事の仕方というものを我々は積み重ねていかなければならないんではないかと思います。そして自分自身が本当にしたいことをしている、という喜びを持って仕事をする状態をつくっていかないと、人生に喜びというのは湧いてきませんから。とにかく、人生の目的というものを欲求として持つ、欲求としての理想を持つ、そうしないと、本当の命が喜ぶという生き方は出てこないんだ。頭で考えた目的や理想は、命を苦しめる。辛い苦しい人生になってしまう。どういう風にしたら自分が今やっている仕事の中に、喜びというものを感じることができるのか。今やっている仕事をどのように欲求に変えることができるのか。言われたからではなく、したいからしているという状態にどうしたら変えることができるのか。本当に真剣に考えていかないと、その仕事におけるプロにはならないし、「さすが」と言われるような仕事の仕方ができる人間にはなれないんではないかと思います。同じするんだったらいやいやながらするのではなくて、したいからしている状態に持っていく努力をしないと、自分自身が損、と言うかその人生において喜びを感じることはできません。**

**だから、欲求としての目標を持つ、欲求としての仕事を持つことを考えていかないと、本当に素晴らしい人生というものをつくということはできません。したいことをすることが本当の幸せだ。命の目的を実現すると命から満足感、幸せだという気持ちが湧いてくる。我々は永遠の命を満足させる、喜ばせるような生き方をしないと、幸せにはならない。永遠の命を喜ばせることは、自己保存と種族保存という命の目的を実現するという生き方を自分自身がしてあげる。個体的生命がせいぜい100年生きる命を、永遠の命の目的を実現するために生きるという生き方をしてあげれば、幸せな気持ちが湧いてくることになるわけです。**

**そう考えると、命の目的である自己保存の欲求というものが、人間という命から出てくるとどうなるか。自己保存の欲求という生命の目的が、人間という理性と能力を持った命から出てくると意志になる。意志とは、自己実現・自己創造・自己感性の力である。自己実現の人生を生きることは、永遠の生命の目的を実現することになるから、幸せだなと感じるわけです。もう１つ、種族保存の欲求も生命にはある。２つ目の種族保存の欲求というものが人間という命から出てくると、愛になる。だから、生命の目的は自己保存と種族保存であるが、人間における人生の目的は意志を実現し、愛を実現するところにあるんだ。意志を実現するとは自己を実現することである。つまり、自己実現の人生を生きること、仕事において成功することである。愛とは、人間と人間を結びつけることである、人間関係の力である。愛の目的は、素晴らしい人間関係をたくさんつくることである。人生の目的は意志と愛を実現することにある。これは、生命の目的である自己保存と種族保存が、人間という人生において出てきたときに意志と愛になる。だから、意志と愛を実現し、仕事において成功して素晴らしい人間関係をたくさんつくっていく、この努力をすることによって永遠の生命に喜びを与え、目的を実現してあげる。そういう生き方をするから幸せになれる。幸せだなという実感は、永遠の命から湧いてくる。せいぜい100年生きるこの命を、命の目的を実現するために使ったとき、幸せという実感が湧いてくる人生になる。生命の目的というものが２つしかないということは、人生の目的もやはり２つしかないんです。我々が本当に幸せを実感するためには、意志を実現して、自己を実現して、自分の仕事において名を成す。そして、素晴らしい人間関係をつくる愛の実現を考える。この２つが、人間が本当の幸せを手に入れる生き方であります。人生の目的は意志を実現し、愛を実現することなんだ。だから人生は意志と愛のドラマだ。人間は誰でも意志するもののために生きて、意志するもののために死ぬんだ。人間は誰でも愛するもののために生きて、愛するもののために死ぬんだ。それが人生の骨格だ。本当に幸せを望むならば、どういう目的を持って人生を生きなければならないのか。意志を実現する、欲求としての理想を持って自己実現の人生を生きる。そして、今自分のやっている仕事において名を成す。会社においては出世をして、会社になくてはならない存在になる。それを通して自分の人生をつくっていく、それが自己実現。そして、あらゆる人間関係において素晴らしいものにしていく努力をする。それが自分が幸せになる道であります。本当に幸せを求めるならば、その原理はその２つしかないんだ。生命の目的を根底にして人生の目的を考えて、人間が人生をどう生きたらいいのかということを考える筋道であります。**

**そこでまず意志を実現するとは一体どういうことなのか。意志を実現するとは、自己実現することである。自己実現・自己創造・自己感性の自分の人生をつくっていくという生き方をするためには、まずは意志の強い人間にならないといけない。意志の弱い人間では、自己実現の人生は達成できない。意志が弱ければ、物事を途中で放棄する。ちょっとした問題や辛さが出てくると止めてしまう。それでは本当に自分の人生を自分が納得するところまで仕上げていく、成功というものを手に入れるという人生は手に入りません。成功を手に入れようと思ったら、意志の強い人間にならなければならない。意志の強い人間とは、どういう人間なのか。これまでは意志の強い人というのは、どういう風に考えられていたかと言うと、これまでの哲学では意志の強い人というのは理性的な人だと言われてきた。意志の強い人というのは、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことを最後までちゃんとやり遂げることができるという人。そういう人を意志が強いと言ってきました。意志が強い人間というのは、我慢できる。我慢できないような奴はダメだと言われてきたのが、これまでの人間観であり、これまでの意志の強さに対する理解の仕方でした。**

**だけど、自分のしたいことを我慢して、しなければならないことを最後までちゃんとやっていける…これも必要な場面がありますが、そういう理性によって作為的につくり出された人為的な意志の強さというものは、自分のしたいことは我慢する、と我慢しなければならないものがあるだけ、その理性によってつくられた意志の強さには限界がある。理性によってつくられた意志の強さというものは、作為的につくられたものだから、本当に障害ができて、自分のしたいことができなくなってしまうと、理性はやめる理由をちゃんと考えてやめてしまう。人生において望む意志は、不撓不屈の意志だ。どんな困難でも乗り越えていく、というのが本当の意志の強さの内容なんだ。理屈抜きの根拠がないといけない。意志の強さにおける理屈抜きの根拠とは何なのか。それは、命から理屈抜きに沸いてくる欲求の強さだ。命から理屈抜きに湧いてくる欲求・欲望・興味・関心・好奇心の強い人間こそ、本当に意志の強い人間になれる。理屈抜きに命から欲求・欲望が湧いてきて、初めて人間はどんな困難でも乗り越えていけるという不撓不屈の意志を持つことができるんだ。すなわち、意志の強い人間とは、欲求も強い人間である。意志の強い人間とは、欲望の強い人間である。意志の強い人間とは、命から湧き上がる興味や関心や好奇心や認識欲の強い人間なんだ、というのが私の哲学である感性というものを原理にした感性論哲学における、意志というものに対する理解の仕方であります。本当に意志の強い人間になろうと思ったら、理性的な人間になってはならない。本当に意志の強い人間になると思ったら、欲求の強い人間にならなければならない。命から抑え難き欲求が湧き上がってくるという人間にならなかったら、不撓不屈の意志を持てないんだ。どんな困難でも乗り越えていく生き方はできないんだ。実際問題、人間は欲求が湧き上がってくる限りにおいて、行動を止めない。欲求がある限り行動し続ける。行動力というのは、欲求によって支えられているんだ。そしてその湧いてくる欲求が強くなれば、行動力も強くなり、また意志の力も強くなって、そしてどんな困難でも負けないという不撓不屈の意志ができ上がる。**

**どうすれば一体、そういう不撓不屈の意志という、どんな困難でも乗り越えていくという強い意志の持ち主になれるのか。どうすれば、命から抑え難き欲求というものが湧いてくるのか、そのことを考えていかなければならない。どうしたら自分の命から抑え難き欲求という、強い欲求を引っ張り出すことができるのか。そのことを考えていかないと、自分自身を意志の強い、不撓不屈の意志を持つ人間にしていくということはできません。不撓不屈の意志というものをつくっていく方法論というものが３つあるんですけども、それをちょっと休憩を入れてから後半の最初にお話をします。どうもありがとうございました。**

**後半に入ります。**

**先ほどの続きなんけども、どうすれば抑え難き欲求と言うか欲求を命から引き出して、そして不撓不屈の意志をつくれるのか。なぜ欲求が大事なのか。命から湧いてくる欲求というのは、本当の自分というものを意味するもので、理性というのは、これまでは本当の自分だと言ってきたものなんですけど、実際のところ理性的になればなるほど個性がなくなっていって、自分から遠ざかる。本当に我々が俺・自分・私と言っているものは、命から湧いてくる欲求のことです。欲求がない人間は、自分のない人間だ。欲求のない人間は、自分の人生をつくれない。だから欲求というものを命から呼び覚ますことは、本当の自分に出会うことだ。本当の自分を掴むことだと言えるんです。今お話していることは、単に皆さん方ご自身の問題としてだけではなくて、結婚されて子どもを持ったならば、その子どもを育てるためにも親として知っているべきことです。子どもを育て、子どもを立派な人間にしていくために話してあげたり、あるいは子どもの人生の生きる力になってあげるためにも、親として知っていなければならない重要な人生の原理であります。**

**どうすれば我々は激しい欲求が命から湧いてくる人間になれるのか。どうすればどんな困難でも乗り越えていく、不撓不屈を持った人間になれるのか。その方法論が３つあります。**

**１番目は、命から欲求を呼び覚ます。命から本当の自分というものを引っ張り出すために、理性を手段能力に使って自分の命に３つの問いを発する。３つの問いとは、どんな人間になりたいのか。どんな仕事がしたいのか。将来どんな生活がしたいのか。人生というものを人間として生きていくために、避けて通ることのできない３つの課題という風に言うことはできます。「俺はこんな人間になりたい」という欲求を呼び覚ます。それが湧いてきたならば、それを実現することが自己実現なんだ。それを実現するところに喜びがある。生きがいがある。そのことによって幸せになるんだ、と言えるわけです。**

**だけど、どんな人間になりたいのか。どんな人間と言われてもそんな人間なんていない。いるのは男と女だけだから、自分に対して問う。「どんな男になりたいのか」「俺はこんな男になりたい！」という欲求を引っ張り出してくる。本当に自分がそういう気持ちが湧いてきたのなら、それこそ抑え難き欲求であって、それが自分自身の人生を生きる不撓不屈の意志になってくれる。営業マンなら、どんな営業マンになりたいのか。美容師なら、どんな美容師になりたいのか。…どんな経営者になりたいのか、どんな先生になりたいのか。今自分の置かれている立場を課題にして、自分のなりたい人間像を命から引っ張り出す。どんな男になりたいのかを自分に問うても、「俺はこんな男になりたい」という欲求が湧いてこなかったら、自分はどんな男になりたいと思っている男なのかを探す、男探しをしないといけない。男であるのにどんな男になりたいかという夢がないことは、結果として「俺はどうなってしまうの？」という世界です。自分ながらどうなるのかが分からない人生では、自分の人生とは言えない。それは生きているのではなくて、流されているんだ。自分の人生を生きていくのであれば、男であれば「こんな男になりたい」という自分の個性としての夢というもの持たなければならない。こうなりたいと思って初めてそうなる道が出てくるのであって、理想を持たなければ、目標を持たなければ自分の人生はつくれない。富士山に登ったのは、登ろうと思った人間だけですから。登ろうと思わないと登れませんし、登りません。意志を持って初めて行動が出てくる。人生というものも、こんな男になりたい、こんな女になりたいと思って、初めてそうなれる自分の人生ができてくる。とにかく、男であったならばどんな男になりたいのかをまず決めないと、男としての人生は始まらない。もし、何も湧いてこなかったら、男探しをしないといけない。そのために、小説を読んだり、ドラマや映画を観たり、理想の男像を明確にする。それが、なりたい男になるための方法論であります。まずは、どんな男・女になりたいのか。なりたい人間像を自分で決めないと、自分の人生は始まらない。**

**２番目は、どんな仕事がしたいのか。社会の中で金を儲けて生きていかなければならないから、自分に対してどんなことがしたいのかを問うていかなければならない。そして、自分の命から「こんなことがやってみたい」「こんな仕事がしたいんだ」という欲求を呼び覚ます必要がある。**

**３番目には、人間は時間的存在といって、未来にこんな生活がしたいという目標・理想を掲げることにより、今を生きる力をつくることができる。未来・理想とは今を生きる力である。未来・理想と言えども現実の只中にあり、今を生きている人間が頭の中で未来・理想を描く。未来・理想を明確にすることによって、今自分が何をしたらいいのか、今自分のすべきことが明確になる。未来がぼやけていたら、今がぼやける。未来を考えるのは、今を鮮明に生きるためだ。未来の自分の目標がぼやけていたら、今自分のすることもぼやけてくる。今自分が何をしたら良いのかを明確にしていこうと思ったならば、まず未来を明確にしないと今は明確にならない。今の自分の生き方があまりはっきりした目標がない、何がしたいかわからないというのは、結局は未来がぼやけているから。未来を明確にすれば、今すべきことが明確になる。そのことのために、将来はどんな生活がしたいかを自分に問うて、「こんな生活がしたい！」という未来を絵に描いたように明確にする。そのために、今自分は何をどう生きなければならないかがハッキリしてくる。未来とは、今を生きる力だ。どんな人間になりたいか、どんな仕事がしたいのか、将来はどんな生活がしたいのか。問うて答えをハッキリさせる。つまり、命から欲求を引っ張り出す。自分の命から湧いてきたものが、本当の自分だ。それを実現するのが自己実現だ。理性で自分の命に問いを発して、自分の命から欲求・欲望を引っ張り出す。そのようにして我々は抑え難き欲求をしっかり持った人間になれる。３つ問いがあるわけですから、この内のどれでもいい。**

**どんなに人間なりたいのか分からなくて、どんな仕事がしたいか分からなくても、将来どんな生活がしたいのかがハッキリしてくれば、そこから自分の人生は開けていく。３つの内のどれかで自分の人生がつくれる。そうして命から欲求を引っ張り出すという方法で不撓不屈と言われるような意志の強さをつくっていくことができます。**

**２つ目は、先ほど申し上げたことですけど、物事の意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを理性で考えて、そして意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを感じる感性をつくっていく。感じたらやる気になる。命が燃えてくる。興味関心が湧いてくる。そういう方法で命から湧き上がってくるものをつくれる。どんどん、毎日毎日、意味・価値・値打ち、素晴らしさ・凄さを考えていくと、日を追うごとに意志が強くなる。抑え難き欲求が湧いてくる。そういう自分ができてくるわけであります。まずは、欲求を呼び覚ますことが不撓不屈を意志をつくる根本原理です。意志の強い人間は欲求・欲望の強い人間だ。最高の幸せは、したいことをすることだ。したいことができないのは不幸だ。したいことがないのは奴隷だ。まずは、したいことをつくらないといけない。欲求を実現することが自己を実現することだ。確かに欲求の強さは意志の強さをつくってくれる根本原理なんですけど、欲求=意志ではない。欲求が強いだけでは野獣だ。人間として人生を生きていくためには、意志の強さをつくらないといけない。欲求と意志とはどう違うのか。意志が強い人間になるためには、ただ欲求が強い人間になるためではダメだ。人間的な価値ある人生を生きていこうと思ったら、欲求の強さを根底にしながら意志の強さをつくっていかないといけない。**

**では、欲求と意志はどう違うのか。どうしたら本当の意志の強い人間なれるのか。ということを考えていくと、まずはその具体的な例で考えていくと、金がほしいのは欲求。この欲求が湧いてくれば、どういう方法で金を手に入れるかということを理性で考えるようになってくる。金を手に入れるためには、もちろん仕事をすることもある。競輪競馬もある。宝くじもある。泥棒もある。ひったくりもある。カツアゲもある。強盗もある。いろいろ金を手に入れる方法はある。いろんな方法の中でどの方法で金を手に入れるのかを決めたとき、意志が決まるんだ。欲求が強いだけでは、金が欲しいという欲求だけ。それだけでは野獣なんだ。人間としての人生を生きていこうと思ったら、金が欲しいのであったらどういう方法で金を手に入れようかと理性で考える。そしてこの方法で金を手に入れようと決めたとき、意志が決まるんだ。すなわち、欲求と意志との間には、理性によって考えて、いろいろ方法論がある中からある１つの方法に決めるという行為が介在する。欲求と意志の間には決断がある。そのことによって意志はできる。そして、意志の強さをつくっていこうと思ったら、意志というものをつくる根本原理である決断とは何なのかをちゃんとちゃんとの味の素で考える必要がある。**

**決断とは何か。国語辞典的な意味では、決断というのは選び取ること。そういう解釈が出てきます。決断というものを選び取るという理解の仕方だけでは、決だけだ。決めることだけ。断、何を断つのか。ということをちゃんと考えていかないと、本当の決断とはならないし、本当の意志の強さというものをつくっていくことができません。決断とは言いながら、多くの可能性の中からある１つの方法を選び取るということだけで終わってしまっていることが多い。いろいろな方法論がある中である方法に決めるという、決めただけで人生を生きてしまって、断、断つことをしないとどうなるか。例えば、結婚なんかでもいろいろ候補があった中から誰かに決めることが結婚するということ。決めただけでいってしまうと、必ず人間は不完全ですから、誰と結婚しても問題は出てくる。問題が出てきたときに「この人と結婚したからこんな悩みが出てきた…ひょっとしてあちらの人と結婚していたらこんな問題は出てこなかったのでは？」。という迷いが出てきてしまう。これが決めただけで、断をしないで進んでしまった人生の迷いであります。ほとんどの人が決断とは言いながら、多くの可能性の中からある１つの未来を、ある１つの道を選び取るだけが決断と思って、人生を生きてしまうという人がほとんどなんだ。だから、ほとんどの人が問題・悩みが出てくることによって、自分の決断が失敗したと思ってしまって、不幸になり迷いの人生に陥ってしまう。本当に我々が悔いのない、迷いのない幸せな人生を生きていこうと思ったら、どういう決断をしなければならないのか。**

**何を断つのかと言ったら、あるものを自分が選んだならば、その時自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨て難い、素晴らしいものがあったとしても、他のものへの思いを断ち切る。逃げ道を塞ぐ、退路を断つ。「俺にはこれしかない」という思い定めの仕方を決断と言います。あるものを選び取ると同時に、他のものへの思いを断ち切る。この断をしていないと、必ず人生は迷いになり、悔いができてきて、そして自らを不幸にする。結婚することを決めても、必ず一緒に生活し始めたら問題が出てくる。そのときにほとんどの人が、失敗しちゃったなと思って不幸になってしまう。ひょっとしてあちらの…と思った瞬間に意識が分散する。意識が分散するから、今自分が選んだその人に自分の全情熱を傾けることはできない。だから、相手も十分な満足を与えることができない。選んだその道に自分の全情熱を傾けることができない。だからやることは全部半端になってしまう。結局、半端な人生に終わってしまって、本当の幸せを感じることができない。迷いの人生に陥る道筋なんです。多くの人が、迷いの人生という轍を踏んで、自分で自分の不幸を呼び寄せてしまっている。本当に我々が悔いのない、迷いのない人生を生きていこうと思ったら、常に決断においてはあるものを取ったならば、同時に他のものへの可能性を断ち切ってしまう。断ということをしていかないと、本当の迷いない人生、悔いのない人生をつくっていくという生き方をすることはできません。**

**そして本当に決断をしたならば自分にはこの道しかない、自分にはこの人しかいない。そういう思いになることができますから、あとはこの道しかないんだから、もうどんな問題が出てきてもひょっとしたらあちらの方が…とは思わない。この道しかないんだから、この人しかいないんだから、どんな問題が出てきたって、出てくる問題をバカになって虱潰しに乗り越えていくしかない。という思いを定めることができる。そうすることによって、どんな問題が出てこようと、出てくる問題を虱潰しに乗り越えていくという不撓不屈の意志が生まれてくる。これは決断という行為によって成り立つ生き方なんだ。この生き方を覚えないと、本当に悔いのない人生というものをつくっていくことはできません。迷いのない人生というのをつくることはできません。本当に決断すれば、確実に悔いのない迷いのない人生が送れる。これが不撓不屈の意志というものをつくっていく基本原理であります。決断をしたときに、人間は本当の成功への道を歩んでいると言えます。なぜならば、成功した人間は問題を乗り越え続けた人だけなんだ。問題を乗り越えることはできなくなったとき、そこでその人の人生は止まる。乗り越え続けることによって、自分の底力、潜在能力は出てきて、能力は成長する。また、問題が出てくることによって、人生を生きる実力が生まれてくる。人間は問題を乗り越えながら成長し続けて、やがて成功に至るということになるわけです。**

**強い意志、不屈の意志というものを本当に持とうと思ったならば、我々は本当に決断しなければならない。決断とは選び取るだけではない、決断とは選び取ったと同時にその時自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨て難い、素晴らしいものがあったとしても、あるものを選んだならば他のものへの思いを断ち切る。逃げ道を塞ぐ、退路を断つ。自分にはこの道しかない、自分にはこの人しかいないという意志の在り方を決断と言うのである。大事なことは、多くの人がこの人と結婚をしたからこんな問題が出てきた。あちらの人と結婚をしていたらこんな問題は出てこなかったのに…と思ってしまって、上手に考えたならば、問題や悩みが出てこない結婚があるはずなんだと思ってしまっている。あるいは上手に道を選んだならば、問題・悩みが出てこない道があるはず。だから、問題が出てきたということは、決断が間違ったんだと思ってしまっている人が多いんです。本当はそうではない。問題が出てこない道はない。悩みの出てこない道はないんだ。どの道を選んでも、どんな人と結婚をしても自分が不完全なるが故の問題だけは必ず出てくる。人間は不完全だから、問題が出てこない結婚はないし、悩みの出てこない人生はない。どんな道を選んでも必ず問題は出てくる。人生には完璧はない、完全はない。問題の出てこない道を探すことは、人生からの逃げだ。問題が出てこないことを求める、願うのは逃げの人生だ。「安逸を貪る 易きに流れる」つまり、楽がしたいだけの人生だ。ほとんどの人が問題と悩みが出て来ない道を求めるんですよ。だから、平凡な人生で終わってしまう。成功した人間は問題を乗り越え続けた人だけ。問題が出てくることを願い始めたら、もうそれは人生からの逃げ。成功はありえない。問題と悩みが出てこない人生なんて無いんだ。求めてもないんだ。だから問題・悩みが出てこない道を求めるという人は、一生不平不満、愚痴を言いながら、こんなはずじゃなかったと言って生きて死んでしまう。悔いの残る人生だ。だから、問題を恐れてはならない、悩みを恐れてはならない。これは不完全な人間である限り、避け難い人生の現象だ。**

**不完全な人間における幸せというのは、問題と悩みのない状態ではないんだ。不完全な人間が、本当に幸せになろうと思ったら、問題と悩みを引き受けて乗り越えていくという力をつくっていく以外にないんですよ。なぜ問題・悩みを引き受けなければならないのか。それは問題・悩みがなかったら、人間は成長しないんだ。問題・悩みがなかったら会社は発展しないんだ。犯罪と事故がなかったら社会は発展しないんだ。社会が発展するためには、犯罪と事故を引き受けながらどうしたらいいのかを考えていくことをしなければならない。会社が発展するためには、社内から出てくる問題や社会から言われるさまざまなクレームを包み隠さないで、それに誠実に答えていく生き方をする以外に会社を具体的に発展させていく道筋をつくっていくことはできない。個人においても、自分に降りかかる問題・悩みというのは、自分が今持っている力では何ともならないというのが問題・悩みなんですよ。改善できるような問題・悩みは問題ではない。本当の問題・悩みというのは、今自分の持っている力ではなんともならないのが、本当の問題だ。そういう問題はなぜ出てくるのか。今自分の持っている力で何ともならない問題というのは、自分の持っている潜在能力、命に潜在していてまだ出てきていない能力を引っ張り出すために問題が出てくることになっている。問題・悩みは自分を成長させるためにのみ出てきてくれる。自分を成長させるため出てくるのは問題・悩みなんだから、そこから逃げてどうするんだ。それに向かって、その問題にぶつかっていく以外に、不完全な人間が人生を生きる道はないんだ。**

**出てくる問題を嫌がるとは、人生そのものからの逃げ。人生から逃げているんだ。自分の成長というものを手放しているんだ。決して我々は問題が出てこないことを願ってはならない。問題がないことを幸せと思ってはならない、問題があることは幸せなんだ。悩みがあることが本当は幸せなんだ。でも問題のない人生はない。悩みの出てこない人生はない。問題・悩みがないことを幸せと思うのは、それは不完全な人間における人生からの逃げだ。本当に自分が幸せを求めるならば、問題・悩みを乗り越え続ける努力をする以外にない。その力を成長させるという努力をする以外に、人間が幸せになる道はない。それがために、我々は決断をするしかない。成功への道を歩んでいこうと思ったら、あるものを自分が選んだならば、その時自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨て難い、素晴らしいものがあったとしても、他のものへの思いを断ち切る。逃げ道を塞ぐ、退路を断つ。問題が出てきても「俺に任せておけ。心配するな」と周りの人を安心させる。出てくる問題を引き受けて、虱潰しに乗り越えていく。人生の問題は、ちょっとでも嫌だなとか苦しいなと思ったら乗り越えられない。どんな問題でも「俺がなんとかする」。自分の選んだ道から出てきた問題だ、と。誰の責任でもない、自分の責任。そう思ったらどんどん力が湧いてくる。嫌だと思うから力が湧いてこない。**

**潜在能力はいっぱい命にあるんだから。人生を生き抜いていく力は全部生まれながらに命に与えられている。潜在能力とは、染色体の中にある遺伝子のこと。生まれながらに無数の潜在能力が人間には与えられている。この潜在能力を成長する過程で少しずつ引っ張り出しながら、人生を生きる力をつくっていく。だけど、まだ潜在能力は約１割強しか顕現してきていない。８割以上が潜在したままで出てきていない。そういう人生を生きる、生まれながらに与えられている力はどうしたら出てくるのか。次々と人生に訪れる問題・悩みを逃げないで、出てきても自分を成長させるために出てきているんだと思い、その問題に立ち向かっていく。そういうことをすることによって潜在能力は、次々と出てくる。**

**人生の値打ち、差は何によって決まるのか。基本的には、その人が自分の人生の中で生まれながらに命に与えられている潜在能力をいくつ引っ張り出したか。それだけが人生の違い。生きるために必要な、問題を解決する力は全部生まれながらに潜在能力として与えられている。それを学校によって先生に引っ張り出してもらって、いろんなことができるようになっていくんだ。だけど、そういう風にしてもせいぜい一割強しか出てきていない。まだ８割以上も命に残っている。自分が問題から逃げなければ、その潜在能力が次々と湧いてくる。結局、人生において幸せではない人は、逃げた人なんだ。本当に幸せだと言える人生を掴んだ人は、問題に立ち向かって乗り越え続ける努力をしてきた人。その違いで人生は決まる。人類が滅びるまでにあらゆる問題を乗り越える答えは、生まれながらに潜在能力として与えられている。あとは、どこまで・どれだけ引っ張り出せるかに人類の未来は懸かっている。潜在能力を引っ張り出して、無限に成長していく成功の人生を歩もうと思ったら、決断しなければならない。問題を恐れてはならない。どんな問題が出てきても怯んではならない。そのために、あるものを自分が選んだならば、どんなに捨て難い、素晴らしいものがあったとしても、他のものへの思いを断ち切る。この道を選んだから問題が出てきたのではない、どんな道を選んでもその道なりの問題が出てくるんだ。だから、自分が選んだ道から出てきた問題を乗り越えていくことが自分の人生をつくっていく、ということ。**

**そして、問題には答えがあるんだ。答えのない問題はない。求めずして問題・悩みが出てくるということは、どんな問題でもどんな悩みでも必ず答えはあるんだ。人知を超えた天の計らいなんだ。成長させるために天が計らって、自分に与えている。答えも生まれながらに天から与えられている。それが潜在能力。問題も潜在能力・答えも人知を超えた天の計らい。問題も答えも天から与えられている。ということはつまり、問題は答え=潜在能力を引っ張り出すために出てくるんだ。だから、問題が出てきたときから答えはあるんだ。逃げずに挑戦していったら乗り越えられるようになっている。だから、人生において大事なことは、答えが出るまでやめないこと。成功するまで、うまくいくまでやめない、という忍耐強い努力の仕方しか成功の秘訣はない。どんなに凄い人でも皆、普通以上の努力をしている。「天才は努力だ」と言われるように、普通以上の努力をしている。成功した人は、成功するまで頑張ったんだ。途中でやめたら失敗なんだ。そうなるためには、それなりの理解も必要。問題には答えがあるから答えが出るまでやめてはいけない。**

**普通は失敗すればするほど、どんどん自信がなくなっていく。これは愚かな生き方。失敗こそ成功への一里塚であって、人間は不完全な存在だから失敗しないと実力ができない。失敗はすればするほど成功へ近づいているということ。絶望と反対の方向に向いている。普通の人は失敗をすると、もうダメだと思う。成功する人は失敗をするたびに成功へと近づいていると思う。ここでやめたら勿体無いと思い、成功するまで頑張る。ちょっとした現象への解釈の違いが人生の大きな差をつくってしまう。とにかく、決断ほど人生において重要な課題はない。問題と悩みは避け難い宿命なんだ。乗り越えることが不完全な人間に課せられた人生を生きる道標なんだ。「この方向へ来い。違う方向へ行ったら、君はダメになる」「この問題を乗り越えたら凄いぞ」ということを教えてくれる。普通はその問題を避けて通る。だから、平凡な失敗の人生だ。問題に立ち向かっていく人間だけが大成功の人生を手に入れる。現実の社会で証明された原理だ。決して問題が出てこないことを願ってはならない。決して問題・悩みが出てこない人生を求めてはならない。それは迷いだ。人間は不完全だから問題は付きものだ。今の自分には問題が無いと思うのは、それはあるのに見えていないだけだ。問題が見えていないことほど危ないことはない。問題があることが安全、無いのは危険だ。あるのに見えていないのは危険だ。不完全な人間において問題があるのが健全であって、無いことは異常だ。問題があって、それに誠実に対応していくことによって成功は手に入る。問題や失敗を隠そうと思ったら、それが落とし穴になって人生を間違う。誠実に正直に隠さずに関わっていかないと、人間の信用はできない。失敗に対してどうアフターケアをするか、そこに人間の誠実さ、信用・信頼が生まれてくる原理がある。失敗を言い訳したり、逃げることをしたら信用がなくなる。認めて償って補っていったら、誠実な人間として信用される。失敗してもいいんだ。失敗することによって実力ができてくる。一度でうまくいったら実力にはならない。今度は失敗するかな、と。しかし、失敗を重ねると、最後に成功を掴むとどんな状況であっても「俺ならなんとかできる」「俺ならなんとかなる」という自信が生まれてくる。これが、不完全な人間における人生を生きる力としての自信の意味だ。失敗しないと、実力にはならない。だけど、失敗に対してどういう風に自分が誠実に対処するかが大事。だんだん自分のやり方が成長していって、最後に成功したという結果を掴む。それが実力のつくり方だ。ぜひ不完全な人間の問題を恐れない生き方を覚えて実践してもらいたいと思います。そうすると、その人なりの素晴らしい人生を獲得することができます。**

**問題・悩みというのは、その人に母なる宇宙が与えた愛ゆえの試練だ。その人を成長させるためにお母さんが子に与える愛ゆえの試練、それが問題・悩みだ。だから逃げてはいけない。自分だけの力で問題・悩みに対応しようと思うから潰れる。人間は不完全だから、「三人寄れば文殊の知恵」と言われるように、自分一人の力で難しければ、その問題を乗り越えていくために助けとなる人をあと２人探し出して、協力してもらったらいいんですよ。相談したらいいんですよ。ただ自分が主体性を持ってその問題を乗り越えようとして、乗り越えるために助けてもらうという意識だったらいい。自分がもうだめだと思って、なんとかしてくれという、自分の人生を諦めたような感じの助けてくれではいけない。それでは、自分の力は成長しませんから、自分自身が乗り越えるために必要な人物を探し出してきて、助けてもらう。協力して乗り越えている。これは、素晴らしい人生。そういうことを「三人寄れば文殊の知恵」という。自分一人の力だけではなかなか問題を解決できない。２人の人に助けてもらえる、それでいいんだ。そのように人生を協力し合って、力を合わせて乗り越えていく。それも会社という、たくさんの個性を持った人が集まっている組織というものの力の在り方です。自分だけで何とかしようと思う必要はない。助けてもらったらいい。とにかく、人生において必要なのは、不撓不屈の意志。決断という行為によって人生を生き抜く不撓不屈の意志をつくっていくことができる。ぜひ問題を恐れない生き方を覚えてもらって実践してもらいたいと思います。**

**もう１つ人生の目的がある。それは命の目的である種族保存の欲求というものが人間という理性を持った命から出てきたとき、愛になる。愛もまた、重要な人生の目的だ。愛とは、人間と人間とを結びつける力。愛は素晴らしい人間関係をつくることを目的にしている。素晴らしい人間関係をつくることによって人間は幸せになる。人間が幸せになる原理は、意志を実現することと愛を実現することの２つが、本当の幸せを感じること。意志と愛を実現することは、命の目的を実現することだ。だから、永遠の命が喜び、幸せを感じる。我々の命はせいぜい100年生きる個体的生命だけど、個体的生命が幸せを感じるためには、本体である永遠の命を喜ばせなければならない。永遠の命を喜ばせる生き方をしたとき、人生において幸せを感じることができるようになる。その本当の幸せの原理は、不撓不屈の意志を持って人生に挑んでいく、自己実現の生き方をするということ。それと、素晴らしい人間関係をたくさんつくるために努力をする。この２つが、人間が本当に幸せになる基本原理であります。**

**しかし、多くの人が幸せのために金を目的とするような人生を結果として選んでしまっている。金があったら何でもできる。金を優先させて、求めるような人生を選んで生きてしまっている人もいる。金というものは、命の外にあるものだ。命に内在する人生の目的は、意志と愛だけだ。だから命の外にある金を人生の目的にして、そのために意志と愛を見失ったならば、確実に人生は金の奴隷となって本当の命の喜びというものをつくり出すことはできない。多くの人が現実に、金を持つことによって不幸になってしまっている。また金を目的にして生きることによって、多くの人をそれゆえに犠牲にして、不幸にして、そして結果として犯罪になってしまったり、あるいは多くの人を泣かせるようなことになってしまって、結局人から恨まれるような金持ちも多い。金ゆえに相続の問題で親戚中が喧嘩になってしまったり、いろいろとそういう問題があるわけですよ。それは人生の目的を見誤るところから出てくるんだ。金よりもっと大事なのは人間関係だ。金よりもっと大事なのは意志を持って生きることだ。だけど、多くの人が金ゆえに本当に自分がしたいことを諦めて、たくさん給料がもらえる会社に行ってしまう。また多くの人が金ゆえに本当に好きな人と結婚しないで、金持ちと結婚してしまう。結果として、金ゆえに愛を捨て、金ゆえに志を捨てて、本当の自分が納得できる人生にはならない。ついついそういう選択をしてしまっている人が沢山いるわけですよ。金に走る。金さえあったら何でもできる。金さえあったら幸せだと思ってしまって、金を獲得することに人生の目的を置いてしまう。そのことによって結果としては、血の通った温かな心を見失って、家族が崩壊し、また敵をつくり、人と争って本当の自己実現ができない。本当の能力というものを発揮した、人の役に立つ仕事をする人生を見失ってしまって、結果としては不幸なことになってしまう。社会における多くの成功者は、社会的地位があって金はあっても、家族を犠牲にしてしまって、家族の犠牲の上に築かれた成功を手にしている人が多いです。これは小説にもなり、またいろんな書物で書かれている経済界の体験談です。結果として子どもの人生がうまくいかなくなったり、夫婦関係で揉めたりと、社会的地位はあっても不幸な人が非常に多い。**

**我々が本当に人生の幸せを実感できる生き方をしようと思ったら、不撓不屈の意志を持って自分の意志を実現していく。志に生きるという生き方と、素晴らしい人間関係をつくることに命を懸けるほどの努力をする。この両方があって初めて我々は、本当の幸せを人生において感じられる。意志と愛は車の両輪だ。どちらが欠けても命から幸せの実感は湧いてこない。そのために基本的には、素晴らしい人生を生きていこうと思ったら、心から愛することができるものと、人生を懸けて意志するものを持たなければならない。そして意志を実現し、愛を実現することを通して獲得した金だけが、人生において意味ある・価値ある金だ。反対に愛と志を犠牲にして獲得した金は、自らを不幸にする。言ってみれば価値なき金と言えます。我々は、意志と愛を実現することを通して、金を獲得できる。そういう人生の生き方を失わないようにしていかなければならない。社会に出たら人脈、と言われるように本当に素晴らしい人間関係をつくることは会社の発展のためにも、営業の成績を伸ばしていくためにも、能力よりも人間関係が重視されるというほど大事な課題なんです。**

**だけど、仕事に命を懸けても人間関係に命を懸けるということはあまりしない。というかそういうことを考えている人は少ない。仕事に成功するためにも、素晴らしい人間関係をつくるために努力をすることは非常に大事な課題であります。もっともっと我々は、素晴らしい人間関係をつくっていくために命を懸ける、使うということを真剣に考えていく必要があります。残念ながら現在は、考え方が違ったり、感じ方が違ったり、価値観が違ったりすると敵になってしまったり、一緒に仕事ができないという状態になってしまっているのが、人類の現状であります。宗教の違いで戦争になる。だけど我々は、宗教が違っても民族が違っても、考え方・価値観違っても、一緒に仲良く生きていける愛の力を磨いていって、そして素晴らしい人間関係をできるだけたくさんつくって生きる、ということになっていかなければならない。そのためには、自分と同じ価値観の人としか仕事ができないという人は、自分しか愛せない人間だ。相手が自分と同じ考え方になってくれないと一緒にやっていけないという人は、自分しか愛していないような人間だ。ちっぽけな人間だ。だけど自分しか愛せないような愛は、自己愛と言って社会的には貧しい愛だ。社会において要求される社会性というのは、考え方が違ったって、性格が違ったって、価値観が違ったって、一緒に仲良くやっていけるというのが社会性があると言えます。自分と同じ考え方の人としか一緒にやっていけないというのは、社会性がないんだ。つまり、社会の中で生きる力はないんだ。**

**本当に我々が社会の中でたくましく生き抜いていく力をつくっていこうと思ったら、自分と違った考え方や価値観の人と一緒に仲良くやっていける力をつくっていく努力をしなければならない。それができなかったら、離婚の激増は止まりませんよ。宗教戦争はなくなりませんよ。明らかに今の人類の人間性というのは、真理は１つという理性に縛られた非常に低次元の人間性しか持っておりません。これから人類は価値観が違ったって、宗教が違ったって、考え方が違ったって、一緒に仲良く生きていける愛の実力を養っていく努力をして、本当に幸せに生きる力をつくっていかなければならない。結婚すればどうしても、どんなに好きで結婚しても、結婚すればお互いに違いが見えてくる。そのときに違うから合わない、性格不一致だと言って、別れてしまうようでは、人生は貧しい。価値観が違ったって、宗教が違ったって、考え方が違ったって、一緒に協力してやっていける自分をつくっていかないと、離婚の危機を乗り越える力もできないし、個性の時代と言われる現代では考え方が違ってもいいんだ。そうでなければ、仲良く生きていけるという個性の時代を生きる人間に、自分自身を成長させることはできません。**

**考え方が違い、価値観の違う人と一緒に仲良く生きていこうと思ったら、どうしたらいいのか。そのためには、同じ考え方の人とばかり付き合っていたのでは成長しない。成長しようと思ったら、もっともっと成長させていこうと思ったら、自分にない体験や経験を持っている、自分にない知識を持っている、自分にない解釈をする力がある人と付き合う。自分にないものを持っている人と付き合って、自分にないものを相手から学んで、自分を成長させていくことをしないと成長しません。同じ考え方・価値観・知識と付き合っていたら気楽で楽しいかもしれないけど、成長はしない。成長しようと思ったら、必然的に今自分にないものを持っている人から学ばなければならない。**

**どうしたら自分の持ってないものを持っている人と出会えるのか。そのチャンスを与えてくれるのは対立だ。対立するということは、相手が自分にないものを持っているということの証明だ。だから我々は、対立を恐れてはならない。対立を迎えいれながら、相手から何かしら自分が成長するために必要なものを学んで、そして「あなたと出会ってよかった。あなたと出会えてあなたからこのことを学んで、僕はこんなに成長できました。ありがとう」と言って、自分と違う考え方や価値観の人に感謝ができる。そういう愛の力を養っていく必要がある。相手から学ぶことは愛だ。相手から学ぼうとしないのは愛がないんだ。愛するとは学ぶことだ。学んで自分を成長させて、そしてそのことによって相手から学ぶから相手のことが分かる。相手を知ることによって、相手と協力できる方法が見えてくる。「相手の短所は俺が補ってやる。俺の短所は相手の長所によって助けてもらう」。お互いが違う能力を持ち、違う考え方であっても、お互いに補い合える相互補完という共生という生き方ができることになるわけであります。**

**しかし、そういう風な価値観が違い考え方が違う人と一緒に生きる力、というものを学校では養ってくれていません。学校では真理は１つということで、「考え方が違ったら敵」という生き方しか教えてくれていません。まだそれは誰もできない。だけど、これから本当に平和な世界、幸せな人生というものを求めていこうと思ったら、どうしても考え方や感じ方や価値観が違っても、一緒に仲良くやっていける自分をつくる以外にはないんだ。でないと人生は耐えて耐えて悩んで苦しんでという状態から脱却できない。相手から学んで自分を成長させる気持ちがあれば、我々は悩みから脱却できる。そのためにやはり自分自身の中に「俺は人間としてもっともっと成長したい。もっとビッグな人間になりたい。もっとでっかい人間になりたい」という成長意欲が自分になかったら、他人から学ぶという謙虚な気持ちはできません。**

**本当に器が大きい、度量が大きい、包容力がある人間をつくっていくために、我々は愛の実力を磨いて、できるだけたくさんの人と仲良く生きていける自分をつくる努力をする必要がある。そのことによって、必ず仕事も伸びる。いろんなお客さんからも信頼されて、親しみを感じてもらって、好きになってもらえるような人間性の豊かさ・幅ができてくる。愛の実力は必ず仕事に活きてくる。とにかく、我々の命はできることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいと思っているんだ。この永遠の命が持っている命の欲求というものを、我々は実現する生き方をしていかなければ幸せにはなれない。命は本当に皆と仲良くしたいと思っている。**

**我々はどうしたら一体、価値観の違う人と仕事ができるんだろう。どうしたら感じ方、考え方の違う人と仕事・生活ができるんだろう。そのことを真剣に考えていかないといけません。そのために大事なことは、先ほど申し上げたことですけど、同じ考え方の人とばっかり付き合っていたのでは楽しいけど成長しない。もっと自分を成長させて、もっと幸せになりたいと思ったら、違った考え方の人、違った価値観の人と付き合って、その人たちからいろんなことを学んで自分を成長させて、そしてあなたに会えてよかったと言える、そういう自分というものをつくる努力をしていく必要があります。それが本当の愛なんだ。自分と同じ考え方の人しか愛せない…それは本当の愛ではない。偽物の愛だ。自分しか愛せないような愛だ。自分しか愛せないような愛で、どうして子孫を残せようか。愛は、種族保存の欲求という生命の目的から湧いてきたもの。種族保存の欲求とは、男が女を／女が男を愛する。他者を愛することがその根本原理だ。自分しか愛せないようなものは偽物。残念ながら今、偽物の愛に我々は支配されて、考え方や価値観の違いで人間関係が壊れてしまって悩んでいる。これが人倫の崩壊と言われる、現在人類が持っている最大の悩みの原因なんだ。**

**ぜひ自分の身の回り・家庭から職場から、価値観や考え方や感じ方が違っても一緒にやっていける…そういう自分をつくる努力を是非やってもらいたいと。とにかく、同じ考え方の人としか一緒にやっていけないということは、自分しか愛せないような偽物の愛だ。違う考え方の人間と一緒に生きていけるのが、愛の実力だ。同じ考え方の人間とだけやっていければいいのであれば愛は要らない、理性だけ十分だ。なぜ、理屈を超える愛が必要なのか。それは、社会には考え方や価値観、性格、宗教の違う人がいるから。そういう人とも一緒にやっていかなければならないのが社会の現実だ。だから、理屈を超えることが大事なんだ。そのために愛が必要なんだ。だから、これから我々は理性も大事だけど、もっと必要な愛の力を磨いていくことが大事。そのことによって本当の幸せを手に入れることができる力を持つし、周りの人をも幸せにしてあげる力を持つことになる。とにかく、人生の目的は意志と愛の実現である。人生は意志と愛のドラマだ。金は命の外にあるものであって、目的にして意志と愛を犠牲にしてはならない。意志を実現し、愛を実現することを通して得た金だけが実のある、価値のある金だ。**

**ということで今日は、人生哲学の根本原理をお話させてもらいました。ぜひ参考にしていい仕事をし、いい人生を生きてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**